

「笹川杯作文コンクール 2014-感知日本-」

～日本語で応募～



公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目 次

《優 勝》

南京郵電大學外國語學院 曾帥帥····· 2

黃岡師範學院 章媽媽····· 3

《二等賞》

大連外國語大學 李森····· 4

北京外國語大學 王新····· 5

《三等賞》

大連大學 丁亭亭····· 6

大連理工大學城市學院 戰曉禾····· 7

長安大學 李月····· 9

東華大學 馬沁藎····· 10

《優秀賞》

安徽大學 鄭致遠····· 11

鞍山師範學院 楊鑫瑤····· 12

井岡山大學外國語學院 陳念····· 13

吉林建築大學城建學院 王建華····· 14

廣東培正學院 林夢婕····· 15

上海理工大學 楊本明····· 16

川崎精密機械（蘇州）有限公司 譚裕儒····· 17

東南大學 王斐····· 18

北京第二外國語學院 朱倩穎····· 20

北京理工大學珠海學院 楊卓凡····· 21

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

《優 勝》

中日関係の行方

南京郵電大学外国語学院 曾帥帥



「誠に日に新たにせば、日々に新たにして、また日に宇宙万物新たならん」。これは中華民族の重要な思想である。過ぎた日々に向かうのではなく、中日関係も新しい方向へ進んでいくことが大事だと思う。また、日本には「信無くば立たず」という言葉がある。信任を得るには、相手の考え方と心が分からなければならない。「理解」が必要だということである。理解は友好往来の礎石だと言えよう。中日関係が安定した方向へ向かうためには、理解の礎石を固める必要がある。

この場合の「理解」とは、仲が良く、何事もなく平穏無事に付き合うということではないと思う。真の「理解」とは、二つのギアが摩擦を利用して噛み合うように、すり合わせるうちに、より遠い未来へ進むということだろう。

大学三年生の時、日本紫金草合唱団の訪中公演に行ったことがある。合唱団の名前である「紫金草」の花は、中国では二月蘭と呼ばれている。戦争時、日本軍衛生材料工場長であった山口誠太郎さんが、中国の紫金山の麓で花の種を摘み取り、日本に持ち帰って、「紫金草」と名付けた。戦後、山口さん一家及びその子孫たちは、戦争への反省と平和への祈願を籠めて、この花を日本各地にまいた。そして、紫金草は平和を象徴する花として、中日両国の人々に愛されるようになったのである。合唱団は「紫金草」を冠して、「歌がすき 花がすき 平和がすき」という気持ちを携えて、数回中国を訪れ、公演をしている。会場に行き行って驚いたのは、合唱団の方々が皆お年寄り、しかも重病を患っておられたことだった。身体に支障をきたしていても、平和の大切さを伝えるために、団員のみなさんは千里の道も遠いとは思わず、足を運んで、そして心を込めて歌を歌っているのだった。合唱が流れると、その歌声はもう単なる音ではなく、継続する精神力であり、澄みきった泉の水のように聴衆の心の田を潤わせている気がした。私はその音声から伝わってくる合唱団の人々の思いに強い衝撃を受け、心を奪われて、心臓がドキドキした。

「南京虐殺事件を通しての議論で、日中関係がぎくしゃくしているこんな時だからこそ、紫金草を通して知った中国南京の人々の悲しさや、日本人として私達が学んだことを伝えるべきです。」と一人の団員は言われた。その言葉には中国人への理解が含まれていると感じた。その誠心誠意の姿に深く感動したと同時に、歴史を直視する態度と平和を求める真心に感銘を受けた。

プログラムの最後に、私は学生代表の一人としてとして、合唱団と合同で「平和の花 紫金草」を歌った。そのとき見た楽譜集には、中国語のメモがぎっしりと書かれてあった。日本語科の学生である私は、ほかの国の言葉を習うことが簡単なことではないと知っている。まして年をとってからはなおのこと。私は合唱団のみなさんが中国を愛している気持ちをその譜面に感じながら、一緒に歌を歌った。

歌も言葉も交流の橋だ。その橋を渡り、互いの心が通じ合えば、距離が縮まり、互いの好意が分かる、とその時私はそう思った。お互いを理解することが、強い共鳴を引き起こし、共に感じられる温かさが生まれる。合唱団の方々の真心がこもった活動は、中国人の心の鏡に映って残っていくにちがいない。

戦争中、二月蘭が中国から日本へ渡り、紫金草として日本に根付き、その名前の合唱団が、中国南京で戦争への反省と世界の平和を願う活動を行ない、南京の学生と合唱している。このような事実がある限り、中日友好の未来は明るい信じたい。

たとえ現在、中日両国の間に様々な不和や反目があるとしても、この不和や反目はただ中日の政治上の不協和音にすぎず、民間の友好往来という主旋律を乱すことはできない。今、私たちがすべきことは、未来に目を向け、交流を密にして、理解の輪を広げ、全体の和音を作り上げていくことである。

中日の関係が、「信をもって 誠に日々新たにする」ものとなることを強く願う。そのためには、民間のコミュニケーションの機会がなによりも必要であると考え。文化交流により、心と心をつなぎ、そこで心と心の距離が縮まれば、中日関係が新しい方向へ進んでいく日は近づいてくるだろう。

日本紫金草合唱団と南京の大学生の交流活動のように、中日の人々で手を携えて、理解をし合い、新たな未来を切り拓くために、私も平和を伝える活動を広めたい。それを目標に、私は日本語科の学生として、卒業後も、より多くの中日両国の人々がお互いの文化や考え方を伝え合えるよう、ほんの少しでも力を尽くしたい。

公共マナーと中国人

黄冈师范学院 章嬌嬌



近年、中国人は海外へ旅する時、様々な無作法な振舞いが度々国内外の各新聞紙に報道され、時にはトップ記事にさえなることがある。「お静かに」「芝生に入るべからず」など中国語だけで示されている警告表記は、中国人の海外旅行の主な目的地であるフランス、ドイツ、日本、タイやシンガポールなどの国でよく見かける。そして、近年急増している大量の観光客は中国の新たな輸出品だと言われるようになった。と同時に、ポイ捨て、割り込み、汚い言葉遣い等々ネットで募集される「海外旅行によく見かける行為」の中で、中国人の一部の観光客の行いはほぼ全リストを占めている。いつの間にか、そのマナーの悪さで「中国人」は「礼儀知らず」「行儀悪い」の代名詞となった。中国人は皆育ちが悪いとは言いがたいが、お行儀が悪いというラベルを張り付ける人は他人ではなく、ご本人だということも争いのない事実だ。

なんと悲しい事実だろう。中国は古くから「礼儀の邦」と称される世界の四大古代文明国の一つである。いったいいつからこの四文字はマスコミが皮肉に用いる専門用語になったのだろう。

人間は怠けものだ。社会性を獲得する前には、生きるための本能というものがある。私から見れば、公共マナーというのは、生き物がその本能を抑圧し、理性に基づいて物事を判断する行為の塊である。トイレで小便を済ませてから水を流さないこと、食事前に手を洗わないこと、列に並んだことに耐えないことなど、これは殆ど人間が生き物としての本能によって発する行為だと考えられる。面倒だからやりたくない。そして自分を守るために楽な立場に逃げるという自己防衛本能でもある。周囲の人間と違うと不安を感じ、他人との矛盾を免れるためにむりやりに自分を周囲に同調させ、漸次自分も環境に適していき、或いは環境に同化される。

公共意識の欠如、その原因は赤ん坊に対して排泄習慣の訓練不足にあると主張する学者がいる。中国には、幼児に股が割れているズボンを履かせるという伝統的な習慣がある。それで子供が心に深く自分を放任する根を下ろし、その後礼儀を守らない理由の一つになるそう。その話に遡ると、今日の中国では、一人っ子政策の実施で出生率が低下しているに関わらず、人口の過剰は依然として深刻な社会問題になっていることが分かる。人口過剰と共に、国民教育不足の問題も生じる。公共意識に関する教

育の欠如は、一部の国民の無作法行為を招くと言っても過言ではないだろう。これは今流行っている少人数クラスでの授業と同じである。人数が減ったから、管理に都合が良い。対応策をもっと簡単に、確実に実行に移せると思われる。

今や中国の民衆はすでに、中国が背負っている「世界大国」の責任を自覚し、国民の素質を向上させるのを不可欠の一環とするにほかならないことに多少気づいているだろう。中国の政府側も民衆の国際認知度を上げることに力を注いでいる。二十一世紀に入ってから、数え切れない公益広告が現れ、様々な教育方案が次から次へと発表される。ところが、周囲の環境を変えるだけで、本当に現状は変えられるのだろうか、私はずっと疑問に思っている。為せば成る。人は結局社会的な生き物だ。理性で自分をコントロールできる生き物だ。小事は大事。普段から細かいところに執着をみせ、少しずつ積み重ねて自分の物事への取り扱い方を変える。そして、堆積は習慣となる。人は羽化し、生き返る。

ナポレオンが曰く、「中国は眠れる獅子だ」ということ。一度目覚めたら世界を揺り動かす。私たち新しい世代はまさにその覚醒の鍵を持っている。夜空をもっと輝く美しく見えるには、後ろに飾っている星一つ一つの努力が欠かせない。自分と仲間を照らす星にでもなれ。中国の未来はそこにある。

《二等賞》

中日関係の行方

大連外国語大学 李森



「その時の朝顔、もう一度振り返るのか。」

私はドキュメンタリー「光の下の戦犯」(鳳凰テレビ 2014年8月放映)の中に出てくるこの言葉を思い出して、ため息をついてしまった。1956年、中国人民の寛大さによって許された元「関東軍」の戦犯たちが、日本に帰国する時に中国人民から朝顔の種が贈られた。見送りに来た撫順戦犯管理所の金源所長は「今度中国に来るときには、武器でなく、平和のしるしとしてこの朝顔を持ってきてください」

と彼らに話した。そしてこの時に帰国した兵士たちは後に約束を果たし、中日友好のかけ橋となり、この「朝顔」も確かに一度中日の間で美しく咲いたことがあったのだ。

ところが、現在、中日政府は様々な問題を巡って非難し合うことを繰り返し、すでに両国関係は21世紀に入ってから最悪の状態に陥っている。例えば今年8月に両国の戦闘機が至近距離に接近した事件などからも、両国関係の悪化がはっきりと分かる。共に東アジアで栄えてきた中国と日本だが、関係の行方は前向きではなく、冷え込む一方で、まさしく「氷」の時期に戻ってしまったと言われている。1972年に両国の国交が回復し、友好的で信頼が強かった頃と比べると、今はやはり何か大切なものが足りない私は考えている。

周恩来総理は中国に拘束された戦犯の処置に関する指示で次のように述べた。

「日本の戦犯たちを厳しく罰して、中日両国の人民の心の奥に互いへの恨みを残すべきではない。彼らが戦争中に犯した罪を寛大に扱い、中日友好の花の種を蒔くべきである。」

これは「やられたらやり返す」という精神ではなく、「徳を以って、怨みに報いる」すなわち戦犯たちの行為に対して恨みではなく徳、寛大さで答えるというものだ。その後、起訴されずに済み、中国政府に釈放された元日本軍の戦犯たちは中日友好の道に踏み出し、「中国帰還者連合」という組織を作り、中日両国の国交回復にも力を注いだのだ。

以上述べたように、これらは全て周恩来総理をはじめとする中国の指導者たちの両国関係の未来のことを考慮した知恵がもたらしたものだ。中国語には「高屋建瓴」ということわざがある。「高い屋根の上に立って瓶の中に水を灌ぐ」というこの言葉の意味は「より一層高いところから、長い目で物事を処理すること」ということだ。このような「高屋建瓴」の視点に立ち未来の両国の人民の平和と共存を願う知恵は中日両国のリーダーたちにとっては欠かせないものはずである。「高屋建瓴」の視点で、中日友好の道に踏み出せば、「一衣帯水」の中日両国の間に明るい未来が期待され、後世に幸福をもたらすことができるのではないだろうか。そして、お互いの間に信頼感が生みだされ、長年の間続いた恨みも消すことができると思ふのである。

中国政府は新しい中米関係を築き、平和かつ穏やかなアジア地域の秩序を作り上げるために、「細かい所に拘らず、一島一地の紛争が国際社会全体に影響を及ぼさないよう両国関係を築く」という対米外交政策を打ち出している。この政策も中日の間の溝を埋めることに活用できるのではないだろうか。国土の領有権を巡る問題は適切な形で慎重に検討する中で、争いによらず解決すべきだ。一方、日本側も中国の発展を恐れる必要は全くないと私は考えている。日本の友人たちに、中国の速やかな進歩が中日双方に利益をもたらすということをきちんと理解してもらえれば本当に嬉しいと思う。

私は中日関係の行方は明るいのだと信じている。あの「平和の朝顔」が返り咲いてくれることを心の底から願っている。最近聴いた歌の中の中のこんな言葉がふと私の頭をよぎった。

「明日また晴れるかな、遙か空の下。」

中日関係の行方 —ここから私たちは始まる—

北京外国語大学 王新



2014年の4月、北京に留学に来た若者たちは、半年の準備を経て、動き出した。

彼らは北京市の繁華街王府井と、桜で有名な玉淵潭公園で「フリーハグ」を行った。「友」と大きく印刷されたTシャツ姿で、「中日友好 free hug」と書いてあったプラカードを手にして、道行く人たちにハグを求めた。それから数日後、彼らを含めた百人の中日の学生たちは、中日友好を訴える合唱「歌声～ここから僕らははじまる～」を披露した。

このフリーハグと合唱のことは、複数のメディアに取り上げられ、多くの人たちから感動の声が寄せられた。

実は、私は陰でこの活動を支える24人のメンバーの一人だった。ことのはじまりは、偶然代表の渡辺航平さんと知り合ったことだった。

北京大学の校内がイチョウの黄色に染まった2013年11月、私は学部の雑誌の編集長として、取材で北京大学に行った。中国のハンセン病村でボランティアをしたという日本人留学生の話を知ったためだった。そこで一緒に現れたのが、華奢な体をした明るい青年——渡辺航平さんだった。彼は上海でのフリーハグの映像をみせてくれた。映像の中で、中日友好を願い、ハグする人々の明るい笑顔は2013年9月の上海の街を照らしていた。感動よりも複雑な感情が胸の中を流れ、そんな彼を見守りたいと思い、私は密着取材を決めた。

隔週のミーティングに参加しているうちに、手伝いたいという思いが芽生えてきて、いつの間にか運営するメンバーの一人になっていた。メンバーは徐々に増えてきて、漠然とした合唱とハグの企画も、だんだん骨肉のあるものとなってきた。みんなの努力で、歌と「友」Tシャツは完成され、合唱のメンバーもいつのまにか150人近く募った。

私もその中で自分の全力を尽くしていた。会議や反省会で、必ず日本人の留学生とたくさん話し合いをした。けれど、やはりまだ気まずさや恥ずかしさが残っていた。2ヶ月経っても、みんなとの距離が縮まらないという無力感に陥った。まだお互い尊敬語を使い、任務を全うしようとする部分が大きく、話し合うこと自体が仕事のようにも感じた。日本人同士がタメ口でおしゃべりしているところを見ると、正直羨まし

かった。中国人が少ないせい、自分はこの団体の中に入っただけで、ずっと溶け込めずに、異質的な存在のように思えた。

こうして、何も解決しないまま、時間だけが経っていった。

活動が進むにつれて、自然にみんなと食事したり、飲みに行ったりする機会が増えてきた。そこで初めてみんなと活動以外のことを話した。将来のことや、お互いの国について思ったことから、恋愛相談まで、お酒を飲みながら、いろいろ腹を割って話した。その場では、中国人や日本人などまるで関係なく、みんな今頃の若者であった。気づいたら、私たちを隔てる何かが徐々になくなった気がした。自分の弱みを見せてもいいような仲になったと感じた。悩み相談に乗ったり、乗ってもらったりするようになった。

みんなと友達になるのは意外と簡単なことだった。

ふと、ハグとはこういうことではないかと思った。手を伸ばし、ハグするということは、自分の弱みを相手に見せながら、相手を受け入れることである。単純な行為に見えて、「恥ずかしがり屋」の中華文化圏の人たちにとっては、さほど簡単なことではないだろう。培ってきた高い信頼がないと、とてもできないことなのである。

けれど、中国と日本は、何千年にわたる交流の歴史がある。それ相応の信頼も根っこにはあるはず。意地を張らずに、組んでいた腕を緩み、お互い一步譲りあって、両手を広げハグしたら、笑って兄弟のように肩を並べて前に歩いて行けるのではないかと思った。

活動が終わってしばらくたってからの2014年4月、私はもう一度北京大学に足を運んだ。校内では、色とりどりの花が咲き誇っていた。この活動を通じてできた留学生の友達と食事をして、吹き抜ける春の風を感じながら、6人で三組に分けて、自転車の二人乗りで校内を走りまわった。満開の桃の花は、風に揺られ、さらさらと笑っていた。

月が満ちてまたかけ、季節は秋から春に変わった。この活動も終わり、参加した学生たちはまた平穏な日常生活に戻った。けれど中日間の交流はもちろんこれで止まったわけではない。長い歴史の中で続いてきた両国間の交流は、流れる川のようなものである。季節によって、水の量は変わるけれど、決してとどまることを知らない。

しかし、私たちはここから始まる。相手に弱みを見せ、受け入れることから始まる。

唐家璇元国務委員が訪日し、福田康夫元首相が訪中した。中日関係の改善の兆しが見えてくるだろう。これから、フリーハグといった目立った方法で中日友好を訴えるというのはなくなるだろう。

私たちは、地道な交流の中に飛び込み、中日友好のために、力を尽くしていくことをここで誓う。

《三等賞》

中日関係の行方

大連大学 丁亭亭



時々友達からこんなことを聞かれます。「あなたは日本へ留学するの？中国と日本はたぶん開戦するって。」こういう声が増えていて、私も悩みました。ただひとつ、私が信じていることは、中国と日本は絶対開戦できないということです。なぜ私はこんな自信が持てるのでしょうか。

一番強い理由は、この二つの国の経済関係です。ある中国の評論家はこう言っています。「中国人は日本製の商品にずっと反対している。しかし、みんなは日本製の商品からもう離れられない。」私の出身地上海には、たくさん日本の企業があります。知らず知らずのうちに、中国人は日本の技術の便利さに慣れました。一方、日本人の方の側にもこんな現象があります。先日、日本の人気ゲーム会社ニンテンドウが新しいゲームを発売し、そのゲームにはたくさん特典がありました。インターネット上の友達が、「特典は、

きつと中国製のものだ」と言いました。確かに、日本に旅行へ行った時、店に入ると、大体中国製の商品に見えました。このような現状はもう大衆に受け入れられています。いま世界中、各国の経済関係は固く結ばれています。その中で、無視することができないのは中日関係です。中国と日本は、互いに制約し合っており、互いに支援し合っています。この平和な状態は自然に継続すると思います。

また、経済の要素と同じく重要なのは皆の平和への想いです。昔、中国と日本の戦争の中で、たくさんの人々が亡くなってしまいました。インターネットで、こんな中国人と日本人の言論を見たことがあります。「もう一度戦争が起こるなら、今度は必ず勝つよ。」そして日本人はこう答えました。「中国はもともと勝戦国でしょう。」確かに結果は中国の勝利ではありましたが、中国人自身にはそのような意識はありません。戦争が一度起こってしまえば、勝者はいません。両方が敗者になってしまうのです。日本は世界の中で唯一の被爆国で、戦争の恐ろしさをよく知っています。中国も古くから「和」という価値観を深く持っています。今の国際交流は、戦争に反対です。平和の対話を進めています。中国と日本の交流もこのような、平和な対話をするべきだと思います。

実は、中国と日本の関係は必ず平和になることができるのです。なぜなら中国と日本の両国は文化が似ているので、互いに深く理解しあうことができるからです。例えば、2008年の北京オリンピックの開会式が日本のテレビ局でも放送されました。私もインターネットで日本人の解説を聞きました。欧米の解説に比べて、日本人のアナウンサーは開会式中の古風な要素をより理解することができました。アジアのたくさんの国が中国から学びましたが、日本は漢字が広く使われているただ一つの国です。先生がおっしゃいました。「もしかしたら、中国古代の文化をよく理解できるかもしれないから、日本の文化を調べていこう。」先生のおっしゃる通り、中国と日本はいろいろな部分を互いに理解することができます。例えば、神社や手毬、和服などの和風のものの美しさをよく感じるすることができます。それはたぶん、中国人以外の民族は理解することはできないでしょう。この文化同源のおかげで、中国と日本は兄弟のように近いです。ですが、欧米などの外のカ国もあるために、今までの両国の国際関係はあまり親密とは言えないかもしれません。しかし、どんな厳しい国際関係だとしても、私は日本人留学生と一緒にいる時、いつも楽しく過ごすことができます。両国の媒体は相手の悪い噂を宣伝することが多いですが、私たち学生同士が交流する時、互いに友達として付き合っています。警戒心などはなく、両国がお互いに進歩するように努力する姿勢を持っています。私は未来を代表するのは政府や媒体の意見ではなく、若者たちの意見だと思います。確かに中国と日本は一度戦争がありました。しかし、これだけ中国と日本は互いに理解することができるのですから、再び戦争が起こる可能性は低いと思います。むしろ、両国は経済や政治、文化などの分野でもっと交流することができると思います。

私は中国と日本の未来の戦争に対して不安がある人に対して、「安心しろ」と伝えたいです。今後、両国の関係はもっと良くなるはずで、平和な未来は私たちが一緒に作り上げるものだと思います。

中日関係の行方

大連理工大学城市学院 戦暁禾



中国と日本はもともと一衣帯水の隣国だ。両国の交流は早くも隋の時代に本格的に始まった。当時に多くの日本人が技術や制度を学ぶために隋に派遣された。ある意味で、彼らのような遣隋使が大化の改新を促したといえよう。それまでの体制を根底から覆す改革であった

大化の改新は、中央集権的政治体制が成立したことで、画期的な改革と言われている。日本はその時を境に奴隷制社会に終わりを告げ、封建制社会に入った。遣隋使と同じ役割を果たしたのは遣唐使である。文字通り、遣唐使というのは日本から唐に派遣された人である。隋に代わって中国を統一した唐は、一大帝国を築いて周辺地域に大きな影響を与えた。唐は建国から一世紀を経たころ、文化の最盛期を迎えた。世界各国の使節や留学生が唐都に集まった。もちろん日本遣唐使団もその中にいた。当時は航海技術が未熟で、海難はしばしばだった。それでも、先進文化への憧れに突き動かされ、彼らは命の危険を顧みず、唐に行った。遣隋使と遣唐使によって、中日関係は非常に深まったといえる。

しかし、中日両国二千年以上にわたる交流の歴史は、いつも順調とは限らない。戦争をきっかけに、中日両国は一定の期間対立していた。戦争のせいで中国国民は日本に敵国意識をもっているが、実際に戦争を起こした人はもう死んだというのも事実だ。歴史は絶対忘れないとはいえ、大局から見ると歴史をひたすらこだわるのは不可能になった。

そこで、1972年に日本の首相田中角栄が中国に来訪し、中日国交正常化が実現した。その後、経済貿易は頻繁に行われるようになり、文化交流もだんだん増えていった。中日関係は平和発展の段階に入った。国交正常化は両国にとって利益になることだ。

しかし、世の中はいつも順調とは限らない。誰にも未来を予測できない。思いがけず、この最近数年は中日関係が谷底に入ってしまった。両国の政治衝突が次々に起こった。2001年4月小泉純一郎は首相になったあと、連年何度も靖国神社を参拝した。日本の首相としては、このような行動をした結果、中国民衆の強烈な反応を引き起こした。両国首脳相互訪問は五年ほども中断した。両国の関係は悪化したが、世界の風潮は両国関係の早期回復を予想していた。しかし、中日国交正常化40周年の2012年は両国の関係をいっそう深化化させる年になってしまった。尖閣諸島をめぐる領土問題は中日関係をかつてない危機に陥れた。「紛争を棚上げし、共同開発する」これは中日両国が、以前歴史問題を解決するために得た共通認識だった。しかし今回の領土問題はそう簡単ではない。野田内閣は中日間で領土問題が生じている尖閣諸島のいわゆる「国有化」を宣言した。この宣言の結果、中日の対立がいっそう激化した。それに、安倍内閣は2013年、日本「普通国家化」を加速し、「対中包囲措置」を実施したため、中日尖閣諸島紛争は引き続き膠着状態に陥っている。中日摩擦や中日対立は多くの分野に拡大され、中日関係は国交正常化以来最も厳しい局面を迎えている。

経済の面でも、2013年の日本のマクロ経済は好調に始まったもののその後低調に推移し、「アベノミクス」の刺激効果は徐々に弱まっている。上述したのは全部事実だとあって、ある人たちは、中日の間で戦争が起こる可能性が高いと言っている。

けれども、グローバル化が進んだ現代世界で戦争を起こすのは無理だと私は考える。一旦戦争が爆発すれば、経済は滞るだけでなく、衰退するだろう。両国の良好な関係こそが国家利益は決め手だ。永久的な敵がなく、永久的な利益がある。中日関係は微妙だ。近年以来、両国間の摩擦は絶えないとはいえ、大きな自然災害があった時には両国は依然お互いに援助し合ってきた。中日の地理関係上、中日の交流は避けられない。況して中国と日本は約2000年の前に交流を始めた。歴史上不快な記憶が残された、この変化を続ける世界では過去や先入観にとらわれ続けるべきではない。平和発展は世界の共同の課題だけでなく、中日両国民の共同の願いだ。その上、グローバル化の進展つれて、世界はますます一体化し、運命共同体のようになっている。だから将来、中日関係はきっと以前より緊密になるはずだ。私はそう信じている。

り現在も未来もこの流れを従わなければならないと思う。

中日関係の行方

長安大学 李月



中国の『論語』に「君子は和して同ぜず」という言葉がある。私はこの言葉は「中日関係の行方」に対して最高の答えだと思っている。

現在でも未来でも、平和は世界の永遠なテーマだ。そして、今でも中日の民衆のなかで、戦争に関する不安は消えていない。だから、両国民衆に安心感をつくりだすのが非常に重要だと思う。

2000年前から、中日の交流が始まった。この中で、やはり戦争は中日関係の分岐点だ。戦争の影響は経済の後退だけではなく、両国相互の信頼も深く傷つけた。祖父は中日の戦争についてのことを話すとき、日本に対する嫌な気持ちを述べる。私の周囲には祖父のようなお年寄りがたくさんいて、彼らの日本に対する態度は、大体、祖父と同じである。この戦争で中国の大部分のお年寄りたちはひどく心を痛めている。このような気持ちは何世代にも影響する。だから、私たちの二十代の若者でもこの影響を受けている。

戦争が終わってもう69年が過ぎ、中日の交流も次第に多くなった。しかし、両国の政治は複雑な関係を保持している。

去年、第九回「日中共同世論調査」の結果は中日両国国民の相互好感度は今までのなかで一番低い。92.8%の中国人は日本に対して悪い印象を持っている。2012年(64.5%)よりやく28パーセント増えている。一方、90.1%の日本人は中国に対して悪い印象を持っている。2012年は(84.3%)である。その理由の主なものは概ね領土紛争と戦争についての歴史問題である。

数年前から日本と中国の政治についての問題が次第に積み重って、両国の国民は互いの好感度が低い。調査を受けた人で中日関係が改善に向かうとみる人は両国とも10%程度で、大部分は未来に対して悲観的な考えを持っている。

しかし、私は日本と中国の未来を明るくすることができると思う。領土と侵略戦争に関する歴史問題は本当に厳しいが、歴史を直視して、新しい協力を追求することが今の大事な問題だと思う。「君子は和して同ぜず」、両国は昔からの衝突と積み重なった誤解とが早急に根底から解決できないかもしれないけれど、経済の共同発展ができ、東アジアの交流と発展を求めるには、両国の共同努力が必要だ。

今の世界に戦争は必要ない。したがって、両国の政府の会談が必要で、両国民衆の本当の利益を考えて、お互いに有利な計画を提出することが重要である。それに、民間交流も本当に重要だと思う。いつでも国民は国の基礎である。だから、国民の相互理解は大事なことで、両国の明らかな未来を求めるために民間の交流を支えることが必要だと思う。両国の文化は、同じ流れを受け継いでいるので、相互理解や相互学習も容易だ。これを通じて、まず、両国の民衆の好感度を強めることが必要だ。

もちろん両国政府の態度は最大の要点だ。侵略戦争に対する歴史を日本政府が直視するかどうかという問題は非常に重要な問題だと思う。戦争が両国民衆に深い傷をもたらしているからだ。それに近年の領土についての紛争はこの傷を強めている。中国の民衆も日本の民衆も戦争に対しては不安な気持ちを持っている。だから、両国民衆の安心感をつくりだすことが必要だと考える。

両国未来の発展の道は同じではなくても、未来の衝突は減らさなければならない。私たちは「同」を追求しなくても、経済と東アジアの平和についての「和」を追求することができると思う。この時代の流れは平和と発展だ。だから、中日両国のゆくえ、つまり現在も未来もこの流れを従わなければならないと思う。

中日関係の行方

東華大学 馬沁蔓



「新婚旅行で中国に行ったんだよ。上海と南京の辺りに。列車に乗っていた時、アブラナの花畑がたまたま目に入ってね。あまりの美しさに感動を覚えたんだ。もう30年も前のことになるけど、あの花畑の様子はまだ鮮明に記憶に残っているよ。」金沢に留学している時、指導教員の西村先生は私にこう言ってくれた。

春になると、黄色のアブラナの花畑は田舎の至る所で見られる。広々としたアブラナの花の海が日差しの下できらきら輝く様子は可愛らしく、確かに人を惹きつける。このような景色との偶然の出会いこそが、西村先生に忘れ難い新婚旅行の思い出を蘇らせ、中国への好感を持たせたのだ。なぜかははっきりと分からないが、金沢から帰国してから、先生のこの言葉が時々心に浮かんでくる。

最初に日本に交換留学に行くことと決めた時、家族からは猛反対された。ちょうど中日関係がひどく緊張している時期だったからだ。釣魚島の領土問題等を巡って、両国は政治の面で様々な摩擦を起こしていた。インターネット上でも極端な反日言論が盛り上がっている状態だった。そのため、家族は非常に心配した。「もし中国人であるお前が日本人に冷遇されたら…」「もし事態が戦争にまで至ったら…」と。このように家族や親友に言われたことのある留日学生は、決して私一人だけではないだろう。しかし留学するという決意は揺るがなかった。日本語を勉強している以上、日本に行って、身をもって日本を実体験するのが一番だと考えた。結局、家族に不安そうに見送られながら、日本への飛行機に乗った。

正直に言えば、私自身も少し心配だった。だが、心配よりも期待の方がより強かった。「百聞は一見にしかず」という諺が語るように、実際に自分自身で体験しないと、真実が一体何かなど分かりっこないではないか。その後の日本での経験は私の考えを実証してくれた。両国の政治上の緊張感と違って、日常生活においてはそのような雰囲気は全く感じられなかった。日本人は国籍や身分に関わらず、困っている人がいれば誰にでも手を差し伸べてくれる、というのが、私が日本に着いてからの印象だった。日本に行ったばかりの私はよく道に迷ってしまい、毎回日本人から親切に案内してもらっていた。「日本人は冷たい」という先入観はすぐに消え去った。そればかりか、日本人の友人もすぐにできた。私が知っている限り、中国人に偏見を持っている日本人は一人もいない。逆に中国文化が好き、中国に旅行に来たいと思っている人が何人もいる。日本国民全体を見れば中国が嫌いな人はいないとは言えないだろうが、私の目を見た日本人の姿は私をほっとさせてくれた——両国の国民は友好の道を歩んでいる。

日本に着いたのは四月だった。ちょうど花見の季節であった。私のチューターの桶田さんと共に、兼六園へ桜を見に行った。満開の時期を少し過ぎていたが、また一味違った趣が味わえた。舞い落ちる花びらを見ながら、桜道を歩き回った。桶田さんは私より一つ上の可愛い女子学生で、当日は綺麗な和服を着て来てくれた。「ここでお弁当を食べましょうか。」と、桜の木の下で、桶田さんは私に微笑みながら手を振ってくれた。私は一瞬のうちに、目の前の景色に見惚れてしまった。ピンク色の桜の木の下で、和服を着ている少女の微笑。これこそが和の美しさというものではないか。日本という国への好感を抱き始めたのはこの時だったかな。恐らく西村先生が中国でアブラナの花畑を見た時も同じ気持ちだったのだと思う。中国のアブラナの花も日本の桜も、美しさ溢れるものだ。日本人も中国人も、美を求めるといった人間の共通性を持っている。だからこそ、互いの美を発見し合って、理解し合うことが可能なのだ。政治上の摩擦は各国の利益のため、違う立場に立っているからこそ起きるものだが、国民である我々が、美を、平和を、友好を、世の中のあらゆる素晴らしいものの姿を末永く保ち続けたいと願う気持ちに国境はないのだ。こうい

う共通の願いを持ってさえいれば、いくら政治的な紛争があっても、仲直りして前を向いて進むことができるように思う。

一年間は早かった。花見の季節がまた来た時、私は留学生生活を終えて国に帰った。元気で楽しそうにはしゃぐ私の姿を見たら、家族の態度も変わった。家族は私の土産話を「へえ」と驚きながら聞いていた。「また今度家族で日本へ旅行に行ってみよう。」と母が言った。

政治上の厳しい背景で、民間交流の重要性がますます強調されている。日本語を学んでいる我々の責任は、双方の国のすばらしさを双方の国民に伝え、共感してもらうこと。両国の友好には我々の力が必要だ。願っているだけでは足りない。努力することだ。我々が自分の役割を果たせば必ず来る。中日友好の明るい将来が。

春はまた来る。その時、アブラナの花も桜の花も満開になる。その美しい風景をぜひ多くの人に満喫してもらいたい。

《優秀賞》

中日関係の行方 —氷河期の希望

安徽大学 鄭致遠



海が荒れ波高く、およそ千年以上の昔、小さな船は中国と日本の間のこの荒海を何度も渡った。恐ろしい自然の力の前に、命を惜しむこともなく、ただ新しい知識と真実を求めるために、彼らは未知なる世界へ旅立った。彼らの努力のおかげで、文化の交流という絆が中国と日本を結び付けた。これがまさに、中国と日本との関係の始まりであった。そして、今、彼らは「遣隋使」や「遣唐使」という身分で歴史書に刻まれ、世間に尊敬されている。

遠い昔から、中国と日本との関係は絶えることはなかった。両国の関係はよく「一衣帯水」という言葉を以て形容されている。この中には遣隋・遣唐使のような文化交流という積極的な面もあれば、戦争という不幸な面もある。しかし、いかに時が流れようとも、中日関係は東アジアないし世界でも極めて重要な2国間関係の一つであるという事実は変わらない。

今、両国の関係は危機に向かっている。子供の時より、今の中日関係は著しく悪化したと、ひしひしと感じている。例えば、領土問題で、一度改善した中日関係は再び冷え切った。2013年度の「中日共同世論調査」によると、9割の中国人と8割の日本人が、現在の中日関係は「悪い」と判断している。いずれも過去9回の調査で最悪の水準である。今の中日関係は氷河期と言えるほど深刻である。また、中日関係の行方に悲観的な見方を持っている人も増えている。今後、両国関係は改善に向かうとみる中国人や日本人はともに1割程度に過ぎず、関係の悪化が更に深刻化するとみる割合はむしろ高かった。それぞれ、中国人は45.3%と半数近く、日本人は28.3%と3割近くまで拡大した。

このような深刻な問題はすぐに解決できないと思うと、悲観論を唱えている人は多い。しかし、実際の中日関係は、私たちが想像する以上に緊密である。私たちは中日関係の未来に自信を持たなければならない。

両国の緊密な関係を深めるのは人々の交流である。去年、私は交換留学生として日本へ派遣された。日本にいた時、日本の皆さんは本当に親切にしてくれた。留学していた大学の半分以上の留学生は中国人で、その数は私の想像をはるかに超えていた。地元の高校で勉強している中国の高校生も結構多い。また、氷河期と言っても、中国の観光客の数は少なくない。中日共同で開催されたイベントも以前より多くなってきた。特に、音楽やアニメなどの趣味に基づき、両国の若者たちが一緒にやったイベントは少なくない。その中にはイベントに参加するため初めて日本に来た中国人の若者がよく見られた。帰国

後、日本の事情を聞きに来た友達に、私は自分の見たことと感じたことを素直に話した。たぶんほかの初めて日本を訪ねた人は帰った後も親戚や友達に自分の感想を話したことだろう。

そして、日本側からは新学期に日本の大学の先生が日本語教師として私たちの大学に派遣された。つまり、私たちには日本語を教えるという交流が始まる。また、私が今住んでいる町には日系企業が結構ある。これらの企業のおかげで、当地の産業は以前より充実し、経済もずいぶん発展した。大学の先輩たちには日系企業で働いている人が何人かいる。経済面以外でも、彼らは会社の日本人たちに当地の文化面のことも時々紹介する。こうすることによって、相手国のことを理解できる人が増えると思う。だから、民間の交流は問題解決を求める重要なキーである。

技術が発達した今日、インターネットなどのメディアで様々な情報があふれている。人々もインターネットを通じて、自分の考えを述べることは簡単にできるようになった。しかし、メディアの情報や意見を簡単に受け止めてはいけな。よく吟味してから出した結論は自分の考えである。そして、中国のことわざ「目で見えるものこそ確か(眼見為実)」がある。メディアの情報より、自分が実際に見たことと感じたことこそが真実である。原始的な帆と操帆技術を使い、鑑真大和尚や遣唐使は命をかけて交流を求め、真実の中国と日本を自分の目で見た。私たちも彼らの精神と勇気を見習うべきだと思う。今のような時期こそ、両国の頻繁な民間交流がより一層重要になってきた。

中日関係の行方に悲観的な見方を持っている人は多い。しかし、私はそうとは思わない。今の氷河期でも、両国の民間での交流を推進している人は多い。このような人々の存在がある限り、両国の交流が絶えることは決してない。私も希望を持って両国の関係を深めるために自分なりの努力をし続けるものと考えている。

中日関係の行方

鞍山師範学院 楊鑫璐



アジアに二つの国があり、互いに学習し、互いに依存している。それは日本海を隔て、眺められるぐらいの中国と日本である。

中日関係の歴史は長くて複雑である。簡単に言い尽くすにはしがたい。中日関係の行方はきつとこの歴史に基づいて発展するのであり、決して楽ではないと考える。不安定の中の日中関係の行方が心配で仕方がない。

今の世の中は、グローバル化が進んでおり、どの国でも協力し合っでの発展が望むはずである。この背景下で、一衣帯水の日中両国はアジアの二大強国として、民間交流を中心に、互い支えて友好的な隣国関係を作るべきだと考える。

中国では、「遠くの親類より近くの他人」ということわざがある。中日両国はまさにこういう関係だと思う。特に経済上両国の相互補完性が強いと見られる。九十年代に以来、バブル経済の影響を受けて、日本経済の不況は続いている。今、中国経済は急激に発展して日本も経済回復を始めたのである。また、日本の先進的な技術、チームワーク精神、忠誠さなどの大和民族精神で作られた日系企業も中国に大きな影響を与えている。

2008年、中国汶川の大震災で、日本は急速に31人の援助隊が中国に赴いた。これも大震災後一番目に中国に到着した外国援助隊であった。また、2011年3月11日の東日本大震災で、中国政府も日本に2万トンの燃料援助と大量の援助物資を提供した。思いも寄らない自然災害は誰にとっても、どの国にとっても同じである。一瞬の間にすべてが消えてしまって、家屋も財産も更に命までも奪われ、大自然に勝ってないのである。この自発的な助け合いは、中日両国の相手に対する思いやりのこめ表現であり、友好関係の証だと思う。

また、中国の長安を手本にして作られた奈良は、千年前に架けた中日両国の架け橋ではないかと思う。これを皮切りに中日両国の絆がますます深くなっていくと考える。

当然中日両国の間に共通点があるが、分岐点も存在すると思う。歴史的問題を認めるかどうか、尖閣諸島の帰属問題などが注目度の高いホットスポットである。これらは中日関係を改善する重要なポイントである。このほか、無責任のメディアは未確認の噂を事実にして報道したことがある。また、両国の言語文化の差異による誤訳も中日関係のプロセスに影響すると思われる。いったい、中日関係のあり方がどうなるのでしょうか。人々は分岐点の前に自国の立場に立つのは当然だが、一方的な考えは私たちの理性を奪い、理性的な発言が出来なくなり、誤解を招いてしまう場合がしばしばあると考えられる。まるで過剰保護された子供の成長に役立たないようである。従って、若者として、目の前にある情報に対して理性を持ち、理性的な判断をして議論するのは大切であると考え。このように現われた偽りの噂が中日の友好関係に影響をしているのである。国民の一人として、政府の意向を変えるのに力が足りない。私はただ世の中が平和で、中日間早く平和の道に戻ることを望むしかない。

中日関係が難しくなっているが、いずれも中日関係の行方は良くなると思う。近年では、アニメを始めとする日本文化は、徐々に中国民間に浸透した。私たちの周りにも日本製品がたくさん増えている。日本の祝日も大衆に知られ、祝い始めたのである。中国語の中に[和語]を使うことも全く違和感がなくなったようで、多くの中国の若者はこの異文化に興味を持ち、恋に落ちてしまうぐらいになった。これらはすべて民間交流の力であると思う。一人の力は弱い、大衆の力を集めては無限大の力になると思う。民間の力を信じて、この力で中日関係の改善に嵐を巻き起こしよう。

日本は2020年のオリンピック主催権を取った。オリンピック大使の瀧川雅美さんがよく語ったの[おもてなし]は私に強い印象を残した。これは世界にだけでなく、更に中国に情熱をこめるの招きであると思う。今回のオリンピックを通して、中日両国がもっと多くの接触を達成し、誤解と衝突を解消することができたらいいなと願う。

私は中日関係の行方は楽観的に期待している。二千年以上の交流の歴史を受け継いで中日両国必ず平和、友好の道に進んでいくと私は信じて、そう祈っている。

中日関係の行方

井岡山大学外国語学院 陳念



中日関係は両国の民衆にとって、戦後以来ずっと敏感な問題だ。そして、中日関係の行方を分析すると、それにつながることはたくさんある。中日両国は一衣帯水の隣国で、昔から頻繁な経済と文化の交流により、緊密な関係を持っている。残酷な戦争のせいで、両国の感情を傷つけ、心に消えない傷跡を残し、それでも両国の民衆はきっと友好関係を望んでいるに違いないと思う。これから、行き詰った局面を打開して、両国関係の新しい局面を迎えたと信じている。

しかし、中日関係と言えば、思わず大騒ぎになる釣魚島(日本では尖閣諸島と呼ばれる)の事件が心の中に浮かんだ。2012年は、中日國交正常化40周年を契機に、両國の戦略互惠関係を深化させるべき年だった。しかし、元東京都知事・石原慎太郎氏による釣魚島の「購入」問題に始まり、野田政権によるいわゆる「國有化」という誤った判断が中日関係がかつてない危機に陥れた。その後、安倍晋三首相の無責任な妄言と行動により、中日関係は波乱に満ちた一年を過ごした。中日兩國関係の発展の行方はどこに向かうだろうか。また、日本の世論と政界で民族主義の感情が高まり、右翼化の傾向が見られる中、中日関係は成長する上での「陣痛期」を迎えているのか、それとも再び先が見えない迷路に迷い込むだろうか。正直に言うと、政治に関心を持たない私には、最初釣魚島に関することは何も知らないが、やはり日本のある政治家をちょっと嫌うようになった。なぜ、そんな無責任な言論を出して、両国の感情を傷つけ、両国の友好関係を破壊するか本当に分からない。

実は、現在グローバル化の進展に従って、経済の方面から見ると、様々な日系企業は中国の市場に入って、中日の貿易往来はますます頻繁になってきた。そして、電子商品を主として多くの日本製の商品が中国の消費市場に輸入されて、人気を得た。また、日本は自然資源が不足な国として、中国も日本に

様々な原材料や木材、鉱産物などを輸出している。そこで、双方の協力はきっと更に中日両国の経済交流を促進し、最終的にはウインウインの素晴らしい局面になることを信じて疑わない。中日友好関係の重要性も言うまでもない。さらに、中日文化も互いに深い影響を与えている。中国では日本語を勉強している人が日増しに増えつつあり、日本文化や日本料理などを研究する人も段々増えるようになってくる。日本の柔道、茶道、相撲などに関心を持つ中国人も少なくない。そして、寿司をはじめ、日本料理も中国の飲食業に進出し、中国人に好まれている。日本の漫画、アニメ、小説なども中国の若者の間でいぶん人気があった。同時に、中国文化も日本文化に深く影響を与えた。中国の詩歌、陶芸など伝統技芸がとっくの昔から日本に伝わって発展を遂げた。

そのうえ、中日関係の発展は順調でないけれど、両国の政府と各種の民間組織は友好関係を保つために、様々な措置を打ち出して、努力を続けている。特に、多くの普通の日本人は自分の方法で、友好関係にそれなりの貢献をしている。日本語科の学生なので、日本人の先生と近距離触れ合い、先生はとも優しく親切だと感じている。それに、中国の先生も日本へ行き、日本の民衆が親しい感じがした。別れた時、彼らも中国人がそんなにいい人だった知らなかった。その例から、両国の民間交流の重要性が明らかになった。民間交流を促進するこそ、両国人民は双方を良く理解できるようになり、関係も真に改善できることも分かる。

最後に、中日友好関係の重要性というのは、なんの方面から言っても何よりだ。しかし、それに対する困る人たちもいる。だから困る人は、中日で争いが出ることを望んでいる。従って争いが起きた時、日本と中国の両国の国民は、いかにこれを紛争にしないかと両方で知恵を出さなければいけないとともに、双方共には損になることをしないように、友好関係を守るように、適切な政策を出さなければならないと思う。それは経済発展に必要なだけでなく、平和を願う両国人民の祈願だ。今後両国の友好交流は盛んになってくることを祈ってやまない。

尊敬し合い理解し合い

勉強し合い進歩し合い

「草の根」の交流から中日関係の改善に

「プラスのエネルギー」を注ごう

吉林建築大学城建学院 王建華



今年、私は中国・瀋陽の某大学院の日本語言語文学専攻を卒業した。在学中、常に起伏が生じた中日関係に関心を持っていた。氷点に達するほど悪化した中日関係は、我々日本語科の卒業生の就職活動に以前では考えられないほど悪影響を与えた。そのような状況でも、私は苦勞を重ねて、ついに某私立大学で教鞭を執ることになり、日本語教師になるという願望が叶った。今年、就職のため、西安、武漢などの日本と関係のある都市へ行った。これらの都市に滞在していた時、中日関係は結局どこへ向かうのか、中日関係を改善する道は一体どこにあるのかを深く考えていた。

西安では、日本奈良時代の遣唐留学生である阿倍仲麻呂の記念碑を見学した。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という和歌を吟味した阿倍仲麻呂は日本の故郷を離れ、唐の長安（現在の西安）に来て、諸官を歴任して高官に登った。ところが交通・政治などの原因で、彼はついに日本への帰国を果たせずに中国で客死した。阿部仲麻呂は生涯を通して、中日関係の発展に大きく貢献した。

その時、中国は世界中の文化が盛んに発展した国であった。日本は遣唐使・留学生・留学僧などによって、中国から様々なことを学んだ。そして、日本も当時の中国朝廷に自国の国書や物品を奉獻し、中国に一定の影響を与えた。西暦 645 年に日本は中国唐朝の真似をして、政治、経済面に様々な新政策を施して天皇を中心とする中央政權の国になった。この「大化の改新」と呼ばれる改革運動を通じて、日本は奴隷制度の国から封建的な国になり、日本の生産力にも大きな進歩をもたらした。

近代以降、アジアは資源豊かな所として欧米の列強に狙われた。逸早く列強の圧迫から立ち上がってきた国は日本であった。この時から日本は中国の学ぶ対象になっていった。当時の中国は各列強に虐められていた状況にあり、亡国の運命から脱する方法を見つけることが必要となる。当時の有識者たちは中国より進歩していた日本を選び、日本に多くの留学生を派遣し様々な先進技術を学んだ。これらの留学生によって持ちこまれた開明的な観点は当時の中国を発展させた。中国に甚大な影響を与えた有名人の魯迅、陳天華、秋瑾も日本に留学した経験があった。改革開放以降、中国は日本と経済パートナーシップになり、両国は貿易上の相互交流が多くなった。

中日関係の歴史を振り返ってみると、両国間に二千年余りの友好的な交流は主とする。この長い歴史は中日両国がお互いに尊重した歴史であり、お互いに学んだ歴史でもある。「古きを温ね新しきを知れば、以て師と為る可し。」中国と日本は一衣帯水の隣国である。歴史的、地理的に見ても、中日両国には生まれつきの繋がりがあり、両国間の交流を避けることはできない。もし、中日両国が尊敬し合い、理解し合い、勉強し合い、進歩し合うことができれば、両国の関係は一層深く友好的に発展することができる。しかも、中日という「引越できない隣人同士」が「ウィンウィン」の関係を築くためには、尊重し合い、理解し合い、気持ちを通わせながら関係を築くことが必要ではないかと思う。これは中日関係史上の基本的な結論だと言える。領土や歴史認識に関する主張が対立する中日関係の改善の実現には、両国の政治家やメディアの努力も勿論重要だが、「草の根」の民間の努力も必要である。少しでも関係が改善されるように、自ら考えて行動すべきだと考える。

日本語に携わる中国人として、私も微力ながら中日友好のために自分なりの努力をしている。私の日本人の先生は2012年中日関係が悪くなり始めた頃、志願者として日本語を教えに中国へ来た。その二年間、私は先生の生活をサポートし先生も私の日本語学習を助けてくれた。祝日を一緒に祝ったり、食事をしたり、時には討議を交わしたりと数えきれないほどの感動を共有した。一番感動させられたのは、先生が中国を離れる際にたくさんの日本語参考書を私に贈ってくれたことである。現在の冷えきった両国関係の中、私は先生と暖かい国際交流を行った。このような中日国民間においてごく普通の交流活動には政治的な対立を乗り越えて、友好を育む力があると感じている。私の考えは、小さな親切でも良い思い出として互いの記憶に残り、後に周囲に語られ、さらにはその周囲にも広がる。一つの「小さな国際交流」で与えられる影響は限られているが、その機会が多ければ多いほど与えられる影響は大きい。他にも、両国国民間にできる「草の根」の交流はたくさんあると思う。中日の国民がお互いに尊重し小さな民間交流を重ねれば、微力ではあるが中日関係が改善に向かう確実な一歩となる。

中日関係の行方

広東培正学院 林夢婕



日本語を学んでいる中国の若者として、私は自分の国を愛していると同時に、日本のことも大好きである。ですから、中国と日本が永く友好関係を保ち、平和に付き合えることを心より願っている。

中国と日本との交流が始まったのは漢の時代であり、それ以来、両国の数多くの人は中日の友好交流のために巨大な貢献をしてきた。これらの方々のおかげで、中日関係はしっかりとした土台に立つことができた。

7世紀から、日本からの遣隋使は中国大陸に頻繁に派遣され、中日両国の交流はとても盛んに行われた。遣隋使の代表的な人物は、聖徳太子により派遣された小野妹子である。また、7世紀から9世紀にかけて、経済や文化などが高度に発展していた唐の時代、中国文化を学ぶために、日本の遣唐使団は前後十数回中国に派遣され、中国に歓迎された。これらの遣唐使は一年ないし数年中国に滞在して、その後中国の文物や制度を日本に持ち帰ったという。遣隋使や遣唐使は、その派遣規模の大きさと交流の幅広さが中日文化交流史において空前の盛況と言えよう。遣隋使と遣唐使は日本社会の急速な発

展を推進したと同時に、中日交流のかけ橋として、中日の友好交流に並々ならぬ貢献をした。一方、中国の名僧の鑑真は困難と危険を恐れずに六回にわたって、十年の歳月を経て、ようやく宿願の渡日を果たすことができた。鑑真は日本で仏教の理論を教え、奥深い中国文化を広め、それらを通じて、日本の仏学、医学、建築などの発展を促進し、今日でも中日両国の国民や仏学界から大いに尊敬されている。

しかし、一方、西暦663年以来、中日両国で大規模な戦争は五回もあった。残酷な戦争は両国民の心を深く傷つけ、中日の友好関係に大きな衝撃を与えた。

中日両国の2000年を超えた交流は、両国関係や両国の盛衰に大きな影響をもたらし、その交流の歴史は、また「和すれば双方の利益になり、鬪えば双方が傷つく」という古来不変の真理をも証明している。中国には「和をもって貴しとなす」(孔子)という説があり、平和と友好は両国、特に両国民にとって最も大事なことであると思う。

両国間の過去はもう歴史になっている。歴史を忘れることは無論許されないが、人間は常に前向きでいなければならないと思う。車を運転している運転手のように、前を見ずにずっとバックミラーを見ることも、バックミラーを見ずにずっと前を見ることも危険で、事故を起こしかねないであろう。前を見ながら、バックミラーに気を使って初めて、無事に車を走らせることができる。我々もそういう気持ちを持たなければいけない。歴史から教訓を汲み取って、前に向かって未来志向の態度を取るべきだと思う。

中国にも日本にも、お互いに誤解しあう人がかなりいるようであるが、その誤解を解消できる人は、我々自身だけだと思う。自らその国の文化や人と十分に接触して初めて、その国のことが分かってくると言える。私は大学に入ってから初めて生身の日本人と付き合い、それまで、日本人に対して悪いイメージを持っていた。大学での数年間、そのイメージを完全にくつがえした。まさに「人から聞いたことは当てにならず、この目で見てこそ確かなのだ」ということであろう。こうしてみると、日本で中国語を教えている中国人の先生と中国で日本語を教える日本人の先生は実に偉い仕事をしているとしみじみ感じた。

同じ青空の下で、同じ美しい地球上で同じ空気を吸っている我々は、みな同じ人間である。国境を越えて、人間という視点から見れば、日本人も中国人もすべての生物が尊敬すべき「人間」である。私は中国人でありながら、2011年日本の東大地震が起こった時、震災地の写真を通して地震の悲惨な光景を見たら思わず涙を流した。その時の私の心の中の悲しみが、2008年中国の四川大地震が起こった時の悲しみと変わらないと今でもはっきりと覚えている。中日交流史を振り返ってみれば、相互訪問をした中日両国における我々の先人らの友好往来への熱望とその献身的な精神に心から敬服させられる。昔の時代は今日と違って、交通などは非常に不便であり、それにも関わらず、彼らは中日友好のために自分の力を尽くした。我々は先人のその精神を引き継ぐべきである。私は日本語を学んでいる中国人として、中国人に本当の日本人のことを教え、他方、日本人に本当の中国人のことを教える責任を持っていると思い、今後もそのために一生懸命頑張っていきたいものである。

ここ数年来、中日関係がぎくしゃくしているが、平和と友好は人心の向かうところであり、大勢の赴くところでもある。これから我々は先人の業を継いでがんばり続ければ、必ずや曇りを突き破り、中日関係の晴天を再び迎えられると確信している。

新しい「万里の長城」の煉瓦になりましょう

上海理工大学 楊本明



切っても切り離せない絆、好きと憎いが交じり合う感情、近くにあって遠い隣人、中日関係ほど複雑な国際関係はありません。近年、相手国の国民に対する憎悪感が増えているように見えるが、実際に日本へ行って、日本に好意を抱くようになった人は多いです。そして、直に中国へ来て、中国に好感を持つようになった日本人も少なくありません。私自身もその中の一人です。

これは初めて日本へ行った時のことです。

北海道に着いたその夜、初めて温泉に行きました。あまりの興奮でさっさと服を脱いで、湯船に入りました。水遊びしながら、背中をタオルでごしごし擦り始めました。「さすがに温泉の国だな、外の雪景色が見えるし、気持ちが高直だな。」とクラスメートに言いました。そばで黙っている先生にこう言いました。「先生、よかったら背中を擦ってあげましょう。」「あつ、いいです」と先生はとても困った顔をして遠慮しました。私は「え、先生は水くさいな、中国人なら、小さい頃から、友達と一緒に銭湯に行く時、いつもお互いに背中を擦るのに」と思いました。

その日の歓迎会で温泉で大きな恥をかいたことが分かりました。本場の温泉とは共同の場所です。お互いに気持ちよく入浴できるようエチケットを守らなければなりません。入浴前には、ちゃんと体をお湯で流してきれいにしてから入るのはマナーだと教わりました。そして、日本人はどんなに親しい間柄であっても、お互いに一定の距離を保ちます。背中をお互いに擦るなんてとても考えられません。

また、これは日本人の先生から聞いた話なのです。先生が中国に来て始めてトイレに行った時のことです。トイレに入って用を足そうとした時、「ドアがない」ことに気づきました。とても恥しくてできませんでした。トイレによやく一人になって、今度こそと思ったら、突然、入ってきた二人が先生をじろじろ見つめました。中国語で何かこそ話していました。では、皆さん、どうしてだか分かりますか。今度、また向きを間違えました。中国のトイレには「ドアがない」「しきりがない」のが多いのです。そして、中国のトイレは入った後、向きを変えますが和式の場合は向きを変えません。つまり用をたすときの方向が逆だということです。

以上二つの失敗談は個人レベルの話ですが国と国の関係においても同じではないでしょうか。私たちはよく口にする中日友好とは何でしょうか。それは一人一人の国民の交流の積み重ねだと思われまふ。温泉に入ることとトイレに行くこと、この二つのことは誰もがします。しかし、この小さなことに両国の間にこんな大きな違いがあります。まして国と国のレベルにいたってはその違いが更に大きくなるでしょう。万里の長城は5000キロにわたる素晴らしい奇跡です。だが、一つ一つの煉瓦を除いては万里の長城にはなれまふ。中日関係の行方というのは大きいテーマです。しかし、日本語を勉強している私たち、そして中国語を勉強している日本人は正にその中日友好の一つ一つの煉瓦です。この一つ一つの煉瓦を大切に、新しい中日友好の長城を作るべきではないでしょうか。

中日関係の行方

川崎精密機械(蘇州)有限公司 譚裕儒



最近、中日関係について「一衣帯水の隣国」とか「二千年の友好関係」とかいうキャッチフレーズに取って代って、よく「中日関係の行方」という表現を耳にするようになるが、「ゆくえ」とはどういう意味であろうかと、気になって、早速、手元にある『広辞苑』を開いて見ると、「①進んで行く先。行くべき方向。②前途。将来」という主な意味が二つあることが分かった。つまり「中日関係のゆくえ」とは中日関係が新たな局面を迎え、転換点に立たされて、今後の中日関係がどういう方向に向かって行くのか、どういう針路に沿って展開していくのか、といったような些か懸念も含めている表現であると思う。

個人レベルの関係においても国同士の関係においても意見の食い違いや主張の不一致、時には、利益利害の対立などが付き物であり、避けられないのである。しかしながら、「大同小異」という大局的な立場に立って、対立や不和を克服できるはずである。また、最も大事なのは「和而不同」という理念を貫徹して、いま中日関係の直面している問題に臨むべきであると思う。「和而不同」は『論語』にある表現であり、「君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず」と解される。「和」は、主体性を保ちつつ、私心を差し挟まず、心からとけ合う状態。「同」は、主体性がなく、気まぐれや利害関係などで他人と同調するうわべだけの付き合いを言い、いわば、「付和雷同」ということである。即ち「和」という精神を貫き、双方の「不同」を認めつつ、食い違いを乗り越えて行くのは「中日関係の行方」であり、取るべき道でもあると確信している。

大学卒業して、間も無く一年間になった。日本語学科の卒業であるから、身につけた日本語の知識を職場に活かそうと考え、日系企業に就職することを決めた。社会人になっている、いまの自分は、中日関係の行方について学生時代より考える視野も広くなり、視点も複眼的になっている。前に勤めていた積水化学の社名は、中国最古の兵法書、「孫子」にある「勝者の戦は、積水を千仞の谿に決するがごときは、形なり」に由来するそうである。当該会社は年に二回、蘇州郊外に位置する玉屏山で環境に優しい植林活動を行うことになっている。ここにおいても、中日の「和」による協力関係が健在しており、中日の「絆」も様々な形で結ばれていると痛感している。両国の中小企業間の協力関係は一層強固なものになっている。一方、日本の中小企業は、中国への投資も増えつつあり、金額としては全体の90%以上を占めている。そして、現在、中日の経済関係は、切っても切り離せないほどまでできており、優れた状態が続いている。なお、中日関係のゆくえはどのような方向に向かえばよいかについて私は私なりに次のように考えている。中国の大気汚染が深刻になる一方で、環境保護に中国政府は目を向け、日増しにそれを重視している。戦後の経済成長期を経た日本では、同じく汚染問題に悩まれ、最後に公害等の解決に漕ぎ着けたため、環境保全などに関する優れたノウハウを持ち、豊かな経験が積み重ねられて、成熟した技術が生まれてきた。公害根治、環境保護などの分野において中日相互協力を通じて必ず大いに成果を上げることができるとともに、堅実な土台である民間交流や学術交流なども一層活発になれば、中日関係は現在より明るい明日を迎えてこれと期待できよう。

経済の好景気と裏腹に、中日関係が悪化する一途を辿っている。一方的な釣魚島の国有化によって領土問題が一気に過熱化したこと、防空識別圏による飛行機異常接近とのニュース、中国の庶民の憤慨を呼ぶ靖国神社参拝等、といったような好ましくない出来事が頻発して、憂慮すべきである。問題が起こるとき、解決方法を熟慮しなければいけない。様々な摩擦を解決するための「行方」は「和而不同」に求めるべきである。つまり、「大きな共通点を見つけ出し、小さな異なる点を残しておく」という「和」の思想に基づいて、互いに相手の立場に立った上で、客観的かつ冷静に相手の考えを分析しながら、winwinの解決方法を講じることを呼びかけたい。なぜかと言うと、アジアの大国としての中日両国は、それぞれの優勢を持ち、中日関係の行方はアジア地域の発展に関わることであるためである。中日両国は相互信頼の関係を深め、いま直面している難局を打開するための環境を整え、それぞれの優勢を発揮させ、補完関係を強化していく中で、緊密な協力関係を発展させることができる。

「和」の観念を掲げ、様々な摩擦や対立等の解決に臨んでいれば、継続的友好、発展を維持できるゆくえを見出すことができる。微力ながらそのために、私が頑張っていきたい。最後に、周恩来総理の生前に中日両国関係についておっしゃった「二千年友好、五十年対立」という言葉を以て、小文を結ぶ。

中日関係の行方 ―民間交流の思い出・南京の街かどで―

東南大学 王斐



中国に「四海兄弟」という言葉がある。「世界の人々が兄弟のように仲良くしよう」を意味する。

今年1月23日、埼玉県飯能市の竹寺で日本漢字文化センターが行った「今年の四字熟語」大会で『論語』の言葉「四海兄弟」が選ばれた。私はこれを聞いて、中国人にせよ、日本人にせよ、「四海」での「兄弟」を望んでいることを知った。

確かに今、釣魚島の問題などで、中日関係は深刻化している。しかし、国家は国民の意志を尊重しなければならない。中国に「小さな花火も広野を焼き尽くす」という言葉もある。人の心を軽視してはならないという意味だ。

私の身近な体験を思い出すとき、多くの中日両国の国民は友好を望んでいることがよく分かる。

一、菜菜さんとお付き合い

ある日、中国の交流サイト「人人网」であるメッセージを見つけた。「私は菜菜。日本人の女の子です。山西省太原市の男性と結婚するため、中国に来ました。QQ でチャットルームを作りたい。日本語が話せる太原人とパソコンで交流したいのです」。

「QQ」とは、MSN とよく似たチャットソフトで、中国の若者に最も人気がある。太原人の私は、早速このチャットに参加した。彼女は温かく歓迎してくれた。私たちは時間があれば、日々のいろいろな話題を話し合った。ある日彼女は「smile ちゃん、この女性用のワンピース、わたしの旦那に似合うかしら？」と冗談まじりに、可愛いワンピースの写真を送ってきた。その時「日本人の女の子って、何と可愛いのだろう！」と思い、一層親近感を抱いた。8人だったそのルームは、今では27人に増えている。このルームに参加している両国の友人が今後も少しずつでよいから、増えていくことを期待している。

二、日本に住む中国人二胡演奏家

中国人の著名な二胡演奏家張濱先生は20年間も名古屋に住んでいる。今年5月29日夜、南京を訪問された張濱先生は、東南大学で二胡の演奏会を開催された。すばらしい演奏会の後、私は張濱先生と一緒に記念写真を撮らせていただいた。その写真は今でもパソコンに大切に保管されている。張濱先生は愛知や名古屋など日本国内ばかりでなく、2010年上海万博の日本館でも、日本人の古典楽器演奏家と演奏したことがあり、中国と日本の古典楽器が繋ぐ中日友好の大きな架け橋を務めている。

三、紫金草合唱団の歌

今でも両目を閉じると、遠くから歌声が聞こえてくる。暖かい舞台がまぶたに浮かぶ。お年寄りの可愛い姿が思い出される――。

それは今年4月14日、爽やかな午後のことだった。揚子江河畔の南京金陵図書館で、日本から訪問した紫金草合唱団が十回目の公演を行った。

「紫金草」は南京・紫金山にあるかわいい野草で、それに因んで名付けられた日本の合唱団である。2001年に初訪中の際、「紫金草物語」(組曲)で「歴史を忘れず、未来に向かう」を合唱し、これまで南京、北京、上海で併せて10回の公演を行った。日本の東京、大阪、奈良、広島などでも活動している。

合唱団の多くの方は60歳以上と思われ、みんな元気で温かな人々だった。公演会後の交流会で、私はあるおじいさんと楽しく語り合った。話の途中で彼は暫く遠くを見つめてちょっと微笑した後、私を見て言った。

「私たちは、いつも自信と希望を持っています。だから、南京に来て公演するのです。これからの中日両国の友好のために、あなたたちのような若者に期待していますよ！」

「そうだ。私たちが頑張らなければ！」とそのとき思ったが、はっきりと答えることはできなかった。

彼と写真を撮った後、記念の千羽鶴と綺麗な紙袋をいただいた。今その写真を見ると、私はピースのサインを出している。それは中日両国の輝く未来を象徴しているようだ。

四月の穏やかな歌声は、私の心に友好を語りかけてくれた。私は胸にしっかり畳んで決して忘れない、その歌声を。

結:「人は信じて、そして生きるもの」

以上の思い出は、南京の街かどで出会った民間交流に過ぎない。しかし、両国国民の友好の心がそこから見えてくる。今の時代は、一国の力だけではなく、世界の国々お互いの協力が必要だ。協力すればもっと強くなるが、争えば二人とも傷つく。両国政府はお互いの理解を深めて尊敬し合い、歴史を尊重し、過去ばかりではなく、未来に視点をおいて欲しいと願っている。

普通の大学生の私は、あまり政治に役立つことはできない。だが、日本人と付き合う時、中国人らしい優しい心と姿を伝えるよう、これからも日本語を学び続けたい。

「人は信じて、そして生きるもの」(日本の“三国志”『風姿花伝: 谷村新司の歌』のせりふ)を心に留めて生きたい。両国国民もこのせりふを信ずることができるはずである。

中日関係の行方

北京第二外国語学院 朱倩穎



もし日本語が専攻でなければ、こんな事はきっと考えないだろう。大学の専攻を選んだのは、まるで運命のようだった。日本に関わるものに全く興味のない私が日本語という選択肢を選ぶとは思わなかった。高校生の私は「もし、将来日本語ができれば、字幕なしでも、名探偵コナンを見る事ができる。なんてすばらしい事だろう」。その程度の認識しかなかったのだ。

確かに、大学に入学前、日本と私をつなげる唯一のものは「名探偵コナン」だけだった。中学生の時、宿題が多く、勉強に集中するため、両親にテレビを見る事を禁止された。しかしどうしても、コナンのアニメが見たかったので、いつも父と母に隠れて、こっそりとドキドキしながら、家の隅でコナンを見ていた。「名探偵コナン」の主人公、江戸川コナンは体が小さいものの、大人の頭脳を持っている。コナンと過ごす日々はおぼろげながら、私に日本というものを理解するチャンスを与えてくれたように思う。

日本と縁があったようで、私は幸いにも日本語学科の学生になり、大学で新しい生活をスタートさせた。初めて、日本人の先生の授業を受けた時、先生がずらずらと日本語を話していたのを見て、とても憧れた。「これが活きた日本語というのか。アメリカ人やイギリス人が話す英語と違うんだなあ」。私はこの時初めて日本人と接したのだった。私と同じように目が黒く、肌が黄色く、アジア人であると言っても、やはり話す言葉が全然違う事から、違いというものもきっとたくさんあるのだと思った。日本人の先生は優しく、知らないうちに、授業は愉快的な雰囲気のもとで終わった。この日本人の先生のおかげで、私の日本への興味が湧いてきたように思う。

それからは、積極的に私が学ぶ日本語学部で開催される日本人留学生交流会に参加し、日本人の友達もできるようになった。日本人と一緒に勉強していくうちに、日本人の特徴がだんだん分かるようになった。

日本人は時間の観念がとても強い。彼らは必ず留学生交流会の待ち合わせの時間の五分ほど前に会場に着いている。日本人にとって、時間は大切なものであるようだ。たとえば、日本では列車の運行において、秒単位まで計算された上で行われている。そして、「時間を守る」という規範は日本人の個性のひとつになったと言っても過言ではない。この強い時間観念のおかげで、日本の電気製品は精密に作られている。そして、世界の中でも最高レベルの評価を受けてきた。これは見習うべき習慣だと私は考えている。

なぜなら、中国では時間を守らない人がどんどん増えてきたように思うからだ。たとえば、一番よく見られる例は、学生たちの遅刻に関する事だ。毎日授業が始まる直前に廊下を走る学生たちの姿を見る事が出来る。これは小さい事のように思えるかもしれないが、先生にとっても、時間通りに教室に着いた学生にとっても、無礼だと思う。それは授業の雰囲気を壊すだけではなく、その学生の今後の人生にとっても、最悪の事態をもたらしかねない。

日本人のもう一つの特徴は礼儀正しいという点ではないだろうか。日本語を学ぶ時、私は敬語が一番難しい点だと考えている。これは日本人が礼儀を重視しているからこそ複雑化したのではないだろうか。そして、日本人の学生が先生と会う時、挨拶の言葉だけではなく、お辞儀をする事も必要になる。中国もずいぶん昔から礼儀大国と呼ばれている。これは中日両国の共通するところである。このような基礎の部分と同じくするからこそ、私たちの交流は順調に進むのだ。

だからこそ、中日両国は政治や経済、そして文化などの分野で盛んに交流が行われている。周知のように、中日両国は一衣帯水の関係で、お互いに大同につき小異を求め、ともに発展してこそ、よりよい未来が作り出せるのではないか。

現在、日本語を勉強している私たち若者は、中日両国をいっそうよく発展させるのが役目だ。人はみんな生まれつき相手に優しく出来る存在であり、輝いた未来が私たちを待っていると信じている。これまでの歴史の中で、中国と日本が築いてきた関係がどうであれ、希望を持って、前向きに努力すれば、きっと新しい道が見つけられるのではないだろうか。

中日関係の行方

北京理工大学珠海学院 楊卓凡



最後の句点を輸入した後、私は送信した。メール向こうは私の初めて日本のフレンドだ。私達は約週に一回メールを送り合っている。彼女はちょっと人見知りな性格で、最初のメールは心が折れるほど短かったが、今日になってはお互いの状況や趣味なども初歩的な了解はあった。

今時中日の関係は緊張しているので、一回目のメール送信の時、色々心配した。両国の関係は付き合う障碍になるのか。しかし、私が思ったことと全然違った。その日本人はまったくこのようなことを言ったことないし、言うつもりもないようだ。

日本語を学ぶ私すらこんな考えがあった、他人はいうまでもない、こんな考えを持つ人は多いだろう。が、私の大学先生の言う通りだ。先生の妹は元々日本のことあまり好きではなかった。先生は日本語を学び、日本のたくさんの見聞を見てきた。妹に話して、理解してもらったら、妹は今日本に対する気持ちは変わったのだ。よく考えてみたら、私もそうではないか。日本に対して、私の父の見方は先生の妹と同じだった。しかし今、父は私を曾て彼は「安全ではない」と思う日本に行かせてくれた。

国は一人一人の人民から構成された。国と国の関係は必ず人との間の関係と繋がっているのだ。私は中日関係の行方について、大した心配はなかった。現在、世界の流れと行き先は和と発展なのだ。和は繁栄をもたらす、戦は損害へみちびく。これは 2000 年の実践から総括の真理だ。

確かに利益で国のあいだはあらそうかもしれない、しかし、中国でも日本でも、相手を必要としているのだ。日本は中国の労働力とか糧食とかの資源を求めている、中国は日本の科学技術などの資源を求める。中国と日本は同じ板の両端にある、一方が落ちたら向こうも落ちる、お互い制約、バランスを保つのが両方にとって一番いいのだ。

たとえ利益で衝突があったとしても、我々普通の民衆は冷静に対応できるはずだ。日本で中国人を殴るとか、中国で日産の車を燃やすとか、それは極めて数少ないケースだ。両国の 2000 年の歴史を分析した後我々は分かる。極端な行為をしても何にも解決できない、冷静に両国の関係に対応して、両国の緊張関係を和やかにするこそが両国のためだ。

両国の関係を明るい未来に導くのは政府や総理達の仕事だけではない。一見民衆はなにをしても無駄に見えるけど、実はそうではない。先生の妹と私の父のように日本語を勉強している家族や友達に影響された人もいるのだ。一人一人の心に相手国への友好気分があれば、相手国への社会全体の雰囲気はよくなるのだ。

自分は普通人だから何にもできないと思わないで。自分は普通人でも何かできるはずと思えば、両国未来の関係はきっと明るくなるのだ。